

Sport
Godzilla®

スポーツ ゴジラ®

第 58 号

特集

スポーツ選手が愛した一本一冊
第13回日本スポーツ学会大賞



スポーツくじ



スポーツ振興くじ助成事業

無料

Sport
Godzilla®

スポーツゴジラ®

〔第58号〕

「ゴジラ」は東宝株式会社の登録商標です。
『スポーツゴジラ』は、日本スポーツ学会が
商標使用の許諾を受け、スポーツネット
ワークジャパンが発行しています。

- | | | |
|----------------------|---------------------------------------|----------------|
| 2 | 第58号を発刊するにあたり | 長田 渚左 |
| 4 | 第13回日本スポーツ学会大賞受賞記念講演
村田諒太の過去・現在・未来 | 構成
阿部 雄輔 |
| 14 | 帝拳ジム&帝拳プロモーションの歴史と功績 | 取材・構成
首藤 正徳 |
| 20 | 日本ボクシング界—マイク・タイソンの衝撃 | 取材・構成
首藤 正徳 |
| ■特集■「スポーツ選手が愛した一本一冊」 | | |
| 26 | 本 風と共に去りぬ | 山口 香 |
| 28 | 映画 リトル・ダンサー | 山口 香 |
| 30 | 舞台 ミス・サイゴン | 小谷 実可子 |
| 32 | 映画 アラジン(Aladdin) | 中村 美里 |
| 34 | 映画 酔拳2 | 三浦 豪太 |
| 36 | 本 ハリー・ポッター | 河合 純一 |
| 38 | 映画 私をスキーに連れてって | 大日方 邦子 |
| 40 | 本 風姿花伝 | 加藤 澤男 |
| 42 | 本 善の研究 | 加藤 澤男 |
| 44 | 本 ガンバ! Fly high | 笹田 夏実 |
| 46 | 『走』第5回 日本人のマラソン好きのルーツはエチオピアの哲学者? | 玉木 正之 |
| 47 | 夢劇場『馬』No.30「早春のときめき」 | 長田 渚左 |
| 48 | バックナンバーのご案内 | |

南 伸坊 表紙のつぶやき 「かつてはこの銅像は各地の小学校に設置されていた二宮金次郎です。小柄な少年というイメージでしたが、実際の身長は180cmもあり、江戸時代の成人男子155cmの平均からすると大谷翔平選手程のアスリート体型でした。」

スポーツネットワークジャパンHP <http://sportsnetworkjapan.com/>
バックナンバー第43号～56号はホームページからもお読みいただけます。

『スポーツゴジラ』は、種目を問わずスポーツそのものの魅力や
価値を語るスポーツ総合誌（フリーペーパー）です。

第58号を発刊するにあたり

編集長 長田渚左



3年前に刊行した『スポーツゴジラ47号』で、スポーツを愛する選者10人から、お薦めの本や映画のDVDなどを紹介していただいた。

新型コロナウイルス感染拡大による外出自粛期間だったことも影響してか、とても好評で、読者の方々から「思わぬ作品に出会えてよかった」との手紙やメールが多数届いた。

そこで今回の58号では、それぞれの競技で頂点を極めたアスリートの方々が、どんな書籍や映画、舞台などを血肉としているのか、直接ご本人に書いていただいた。

ふだんは自分の競技について語ってもらうことが多いが、今回のように影響を受けた作品を推薦していただくと、独自のエモーショナルな部分がにじみ

出ているように思う。

また1月25日に都内で第13回日本スポーツ学会大賞の授賞式及び記念講演が開催された。受賞者はプロボクシングの帝拳ジム及び帝拳プロモーションと元WBA世界ミドル級王者の村田諒太さん。当日は10年に1度の大寒波到来という日と重なり、関東近郊在住の方々から「来場を見合わせる」との連絡が相次いだものの、開場前から熱心なファンの方々が詰めかけ、メディアも20社37人が訪れて会場は熱気にあふれた。

村田諒太さんには対話形式ではなく、一人語りでの講演をお願いした。その方が個性が出ると思ったからだ。講演は想像を超えた興味深い内容となった。後日、取材した記者の方から「村田選手の話聞きながら、アスリートも結果だけではなく、何を語れるかが問われる時代になったのだとあらためて感じました」との手紙をいただいた。再録しましたので、お楽しみ下さい。

ご協賛およびご協力企業・団体



WOWOW



株式会社 御福 餅本家

人と社会を支える力



文藝春秋

上月財団



MS&AD



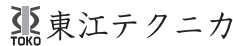
三井住友海上



株式会社東美物流



JWCPE 日本女子体育大学



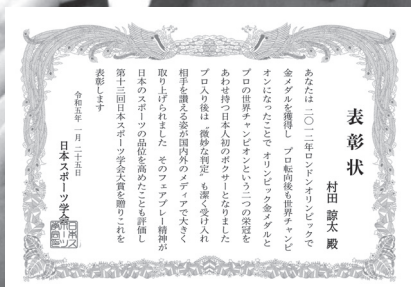
公益財団法人
住友生命健康財団



(順不同)

「村田諒太の過去・現在・未来」

構成 阿部雄輔



左から浜田剛史氏、村田諒太氏、日本スポーツ学会代表理事の笠原一也氏

村田 諒太(むらた・りょうた) 1986(昭和61)年1月12日、奈良県生まれ。伏見中学在学中に奈良工業高校(現・奈良朱雀高校)に通いボクシングを始める。京都都高校に進み恩師武元前川に出会い才能が開花。高校3冠(選抜、総体、国体)ミドル級で5度優勝する。東洋大学に進学し2004、07年全日本選手権優勝。12年のロンドン五輪ミドル級で日本人選手として1964年の桜井孝雄(バンタム級)以来48年ぶりに金メダルを獲得。2013年にプロ転向。17年5月、WBA世界ミドル級王座決定戦をアッサン・エンダム(フランス)と戦い12R判定負け。村田敗北と採点したジャッジ2人が処分を受ける疑惑の判定だったが、対戦の翌日エンダムを訪ねて互いの健闘を讃え感謝を伝えた村田の言動が爽やかな話題を呼んだ。同年10月、エンダムと再戦し7RTKOで王座を奪取。日本人選手のミドル級世界王者は1995年の竹原慎二以来22年ぶり2人目。18年4月、エマヌエーレ・ブランダムラ(イタリア)を8RTKOで下し防衛に成功。同年10月、ロブ・プラント(アメリカ)に12R判定で敗れ王座陥落。19年7月、プラントと再戦し2RTKOで勝利し王座奪還。同年12月、スティーブン・バトラー(カナダ)を5RTKOで下し防衛に成功。22年4月、IBF世界王者ゲンナジー・ゴロフキン(カザフスタン)と2団体王座統一戦を戦い9RTKOで敗れて王座陥落。アマチュア通算138戦119勝(89KO・RSC)19敗、プロ通算19戦16勝(13KO)3敗。帝拳ジム所属。

日本スポーツ学会からいただいた今日の講演のテーマは「村田諒太の過去・現在・未来」。よくいただく「夢を叶えるにはどうすればいいか」とか「目標の達成方法」とか、そういうお題なら楽に話せるんですけど。なかなか難しいお題をいただいたなと思っています。

だって「過去」なんかないし、「未来」もない。よく過去は確実なものと言われますが、過去ほど不確実なものはない。過去なんてものは自分の中でいかにように書き換えてしまう。戦争の歴史を見れば分かりますよね。すべて勝った方が正義ですから。

「現在」もあるようでないようなものです。たしかに今の僕はあるだろうけど、じゃあ30分後、僕と同じ僕かどうか。この講演を終えた後の僕はまた違う人間だろうし、サウナスーツでも着て30分、バートと走って汗かいて帰ってきた僕はまた違う僕だろうし。

人間は常に同じではないということを、僕は自分

の人生を通して教わったように思います。金メダリストである自分、世界チャンピオンである自分、そういうったものは常に流れてうつろって、次第に変わっていく。自分の社会的な立場、存在する意味が変わっていったって、そういうたもろの変化の中で生きていかなければならないのが人生なんだろう。結局その場その場、一瞬一瞬を一生懸命、与えられた何かに対して答えていく。それが積み重なって自分の人生があるんじゃないかと思うんです。

〴〵しんどいけれど嬉しい、楽しい〴〵気持ちの正体

ボクシングを始めたのは中学生の時です。最初は喧嘩に使ってやろうと思って始めたんです。一個上になちよつとボクシングをかじっていた先輩がいて、ボクシングをやっているから喧嘩が無茶苦茶強いって噂を聞いたのがきっかけです。家の近くにあった高校のボクシング部に遊びにいかしてもらったら、その先輩がボクシングで強くなったっていうのは

はったりだつてことがすぐ分かりました。ちょっとやそつと基礎を教えてもらっただけでそんな強くなるわけないと。

やつてみたらボクシングはすごく地味なスポーツで、まずは走ることに、挨拶をすること。殴り合うなんてはるか先のこと。そういう基本ばかりが面倒ですが先に逃げ出してしまつたんですけれど。ただ何かそのボクシング部の生活、中学生の僕を仲間でいさしてもらつた生活って、すごく嬉しかったし、しんどかつたけど楽しかつたんですね。

中学生の頃の僕、ちょっとだけ不良だつたんです。何で世の中に不良がいるのかつて言うと、結局はアイデンティティの問題ですよ。存在理由。自分がここにいてよつていうことを見て欲しくて、不良になるわけです。不良だつて最初は良いことで自分の存在をアピールしようとするけれど、残念ながらに勉強に耐えられない、周りの学校生活になかなか馴染めない。そういうやつが自分のアイデンティ

ティを示す方法つてどうなるかと言うと、真逆に振れるんですよ。悪い方に振れる。悪い方に振れたらみんなが注目してくれる。

僕はまさにその典型のような中学生でしたけど、ボクシング部というチームにいさしてもらつた時の、しんどいのに居心地のいい感じ、安定した感じ。村田諒太君がそこにいていいんだ。当時は村田ではなく高本という苗字だったので、高本諒太君がそこにいていいんだよということ、その「シルシ」を人生で初めてもらったのがボクシングでした。

アイデンティティが膨れ上がる

アイデンティティがそこで生まれた。ここでもう人生、変化しているわけです。喧嘩に使おうと思つて始めたボクシングだけど、そしてすぐに逃げ出してしまふんだけど、なぜか楽しかつた。それはなぜか。そこに自分が存在していいという安心感があつたからで、だからこそその世界で一生懸命生きてや



左から浜田剛史氏、村田諒太選手、88年ソウル五輪柔道女子銅メダリストで筑波大教授の山口香氏

ろうと思うようになった。

高校1年生でインターハイで準優勝します。1年生で決勝まで行ったすごいやつってことで存在を認められたのが嬉しかったし、自慢だった。じゃあ次は何？ 優勝目指して頑張つて、優勝した。優勝したら優勝した自分というアイデンティティをもらえな。じゃあ次は？ じゃあ次は？ って繰り返してすね。どんどんどんどん自分が求めるものが大きくなっていく。膨れ上がったアイデンティティは時に人を苦しめます。次はもつと、次はもつとつてね。ただこれって不幸なのか、幸せなのか。膨れ上がりたいたいという欲望がなければ、僕はこうやって成長してこなかっただろうし、このような舞台に立つこともなかっただろうし。そう思うとあながち否定することもできないんです。

オリンピックでメダルを獲りましたが、1年ちょっとしたら冬季オリンピックが始まって、えっ、もう次のオリンピック？ こないだまで僕のことをち



授賞式でプレゼンターを務めた株式会社WOWOWの田中晃社長

やほやしてくれていた人が違うところに行っちゃうの？ ああ待つて、待つて。ほんとはこう言いたいんだけど、まあそんなもんだからって醒めたふりをして。だけど実はものすごくさみしさを覚えて、落ち込んで、もがいて。人生って何だろう？ 僕たち、こんなことのために生きてきたんだらうか？ 何のためにスポーツをやってきたの？ われわれ夢を叶えたアスリートはこんなふうなつらさを味わっているんです。

どれだけ夢を叶えても、どれだけ何かを達成しても、それは塩水を飲むようなもので、飲めば飲むほど喉が渴いて、また次にどんどん欲しくなってしまう。これは事実としてあるんです。たとえばお金の話。前の職業は大学職員なんですけど、実際に今、大学職員時代に想像できないような金額を得ているにもかかわらず、もうちょっとあったらなあとか、イーロン・マスクすげえなあとか思ったりするのが人間で、これまた事実です。

『夜と霧』が教えること

僕にとつて第二のバイブルとも言える愛読書が、ヴィクトール・フランクルの著書『夜と霧』です。『夜と霧』は、われわれのような夢を叶えてしまったり、目標を達成してしまった人間たちに生きる術すべを与えてくれます。フランクルはユダヤ人の精神科医で、第二次世界大戦中ナチスドイツのユダヤ人収容所に入れられました。収容所のユダヤ人たちは一人の人間としては扱われず、ただの労働力でしかなくて、ただただ使われて死を待つしかない。明日も未来も見えないという状況の中で、死んでしまった人間と生き延びた人間たちの差はどこにあったか。フランクルによれば、生き延びられなかった人間には2つのタイプがある。ひとつは楽観的、楽天的な人間で、たとえば収容所の中で、1週間後に俺たちは解放されるらしいという噂が流れる。楽観的、楽天的な人間はその噂を信じて、その時期を待つ。

だが実際そんな噂が成就することはなく、その日が来た時に彼らは生きる希望を失って死んでしまう。

たしかに、人生こんなふうによくなるはずだ、あんなふうによくなるはずばかり考えている甘やかされた人間に限って、自分の人生がうまくいかなかった時に病を患ったりするのは、今の時代にもよくあることだと思います。

他方、悲観的な人間たちはどうか。俺たちはただの労働力でしかない、どうせこのまま死んでいくんだから、どう生きたつて意味ないだろう。こんなところで働くのはやめようってなったら、それこそすぐにガス室に送られていってしまう。そのような人間たちも生き延びることができませんでした。

ではどのような人間が生き延びていったのか。それは、今置かれている状況において何ができるかという問いかけに答え続けた人間で、それをフランクルは、「人生に対して問いかける」ではなくて、「人生からの問いかけに対して答えていく」ことだと

言っています。今この瞬間、この瞬間に、人生からあなたに問いかけが来ている。それに対して答え続ける。そういう生き方をできた人間が、そのひどい環境のなか生き延びていったと言うのです。

自分から求めるばかりの人生でなく

僕たちアスリートは、神様に、夢を叶えさせてください、人生を輝かせてくださいって、ずーっと求めてきた人間です。たしかにそれは叶えられた。神様は応えてくれた。それだけの恩恵をわれわれにくださった。にもかかわらずそれは長く続かない。それはそう、だつて神様はほかにも役割があるから。

夢が叶った後、目標を達成した後、自分の膨れ上がったアイデンティティをどうにもこうにも持て余してしまふ。これは一度成功してしまつた人間、脚光を浴びてしまつた人間が陥るあるあるパターンですね。僕がロンドンオリンピックの後に引退しなかつたのも、そういうことでした。金メダル獲つて、

48年ぶりだ、ミドル級だつてもてはやされて、そこでアイデンティティが膨れ上がってしまった。けれど半年もすれば別のスポーツや選手に注目が行って。そこでもっと自分に注目して欲しいという気持ちがあつたことは否定できません。

ただ自分が求め続けるばかりの人生つてやっぱり疲れるし、幸せから遠ざかつていくような気がしたんですね。だからこそフランクが言うような、自分から求めるばかりじゃなくて、人生が今あなたに何を問いかけているかを考え、それに答えていくのは大事なんじゃないかと思うんです。

「responsibility」≠「response」

英語で「責任」つて「responsibility」じゃないですか。何で「response」つて言葉が入っているんだらうかと考えるんです。レスポンスつて「返信」とか「応答する」「答える」という意味で、もしかしたら「責任」つて、われわれが何かに対してレス

ポンスすることじゃないか。自分が問いかけるだけでなくて、人生からの問いかけ、誰かからの問いかけに対して今自分が求められているレスポンスを最大限していく。それがほんとの意味の「責任」なのではないかなと思うんですね。

ボクシングに出会ったおかげで経験したこと、考えたことは、僕にとってすごく有難いギフトです。37年間で得てきた神様からいただいたギフトを、これから先どういうふうにレスポンスしていくのか。それを誰かに与えていくのか、もつと増やしてみんなに配っていくのか。「未来」を語るのであれば、そういったことになるのかなと思います。

これから来る何かに対して、もしかしたら来ないかもしれない、来ないということですらむしろ人生からの問いかけだとしたら、そこで僕がどう過ごしていくか。そういった一歩一歩が結局は未来を創る。むしろそれ以外のことなんて創造神じゃない僕にはできなくて、そうやってこれからの自分のレス

ポンスビリティを果たしていく。それが今日のお題の「未来」に対する答えなのかなと思います。

セカンドキャリアに燃えない理由

夢を追いかけるって、リスクがあります。アイデンティティが膨れ上がってしまうから。オリンピックに出て、メダルとか獲っちゃって、地元でもちゃほやされちゃって、何か勘違いしちゃって、俺は芸能人なんだみたいなところで生きちゃって、それで失敗していく人間だつてたくさんいるわけです。

成功したアスリートがセカンドキャリアに行けない、あるいは仕事に就いてもすぐにやめてしまう一番の原因は、彼らの人生最大の目標がすでに叶ってしまったからです。子供の頃に見たサッカー選手になりたい、プロ野球選手になりたい、ボクシングのチャンピオンになりたいって夢が20歳そこそこで叶ってしまった。その時のエネルギーとか情熱をもう一度持てと言われてもできないですよ。

選手だった時、あんなに熱くなつたのに、全然熱くならない。仕事やれる気がしない。ましてや給料はほんの数十万円？ 野球やつてた時は何千万円もらつてた、ボクシングやつてた時はこうだつたつてなると、どうしてもやる気になれない。アドレナリンが出ない。それゆえに能力を發揮できない。

「夢を追いかける詐欺」だつて言うんです。「夢を追いかけるーっ!!」つて言われて追いかさせられて、「跳べーっ!!」つて言われて跳ばされるんだけど、着地するところがなくてヤバイ。そんな感じです。

学会の知識と自分の経験を融合させて

やっぱり事前の知識が必要です。スポーツで活躍した後何が残っているか。リアルな実情を、僕はそれこそJISS（国立スポーツ科学センター）やNTC（ナショナルトレーニングセンター）で合宿している子供たちにも教えてあげたいと思うんです。

日本スポーツ学会には大学の先生もおられるし、そういう人たちをサポートする知識を与えて欲しい。スポーツをただひたすら発展させていっても、その先にあるもの、そこである意味使われ、使い捨てられた人間たちの惨めさと言うか、それを経験してきた身としては、メディアやスポンサーはそこをないがしろにしてきたと思うんです。

僕も経験者として何かしら貢献ができないかと思えます。日本スポーツ学会の知識と僕らの経験を融合してサポートするのは意味があるんじゃないか。こういった経験をさせてもらっている私わたくしをどうぞご利用いただいて、一緒にディスカッションしていければ、日本スポーツ学会のアイデンティティ、存在価値も高めていけるし、人に何かを返していける「未来」を創れるんじゃないかと思っています。

（本稿は2023年1月25日、東京・渋谷区ハクジュホールで行われた第13回日本スポーツ学会大賞受賞記念講演を構成、再録したものです）

村田諒太の愛読書



オーストリアの心理学者で精神科医のヴィクトール・E・フランクフルが、ナチス体制下での強制収容所生活について綴った『夜と霧』。約70年前に出版された本書は、英語版だけでも発行部数が900万を超えている他、17か国語に訳されるなど今なお読み継がれている世界的名著だ。

本書の最大の特徴は、強制収容所での生活とそこでの囚人の心理、著者が奇跡的な生還を果たすまでに行った選択の数々が心理学者ならではの客観的

な視点^①で描かれていることだ。読者は自然とその追体験に誘われるものの、かといって悲惨な歴史的事実に圧倒されてしまうわけではない。むしろ、読み進めるごとに感動が増すのを覚え、読後は不思議な爽やかさに包まれる。

また詳述は避けるが、著者がなぜ生き残ったかに繋がる興味深い言及にも一つ触れておこう。強制収容所での生活が始まると、囚人たちの中では生命の維持という自己防衛に集中するあまり無感動・無感覚になる、いわゆる「内面的な死滅」が進んだそうだ。一方、そうした極限状態にありながらも一部は時に自然を愛で芸術を楽しみ、フランクフルに至っては「ユーモア」を日課として課していたという。生還を果たした者は「心の武器」とでも言うべきものを携えていたわけである。絶望的状况にありながらも生きる希望を失わなかった事実への感動はさることながら、こうした記述から「人間とは何か？」を深く考えさせられる。

(山内亮治)

帝拳ジム& 帝拳プロモーションの 歴史と功績

聞き手 長岡裕生
取材・構成 首藤正徳

表彰状

帝拳ジム・帝拳プロモーション 殿

貴ジム会長の本田明彦氏は、先代明氏の遺志を継ぎ、十七才で会長とられ、マネージャー

長野ハル氏と二人三脚で選手育成を図り、

海外に強力な人脈を築かれました。

加えて、日本を世界屈指のボクシング大國へ導く、フェアな興行を行われてきました。

それは、日本ボクシングはもとより、日本の

スポーツの品位を高める役を果たしています。

今なお未来へ向かう大きな志を高く評価し、第十三回日本スポーツ学会大賞を贈り、これを

表彰します。

令和五年 一月二十五日

日本スポーツ学会 代表 日原 正徳



長田 本日は帝拳ジムの浜田剛史代表に、帝拳ジムと帝拳プロモーションのヒストリーと、日本のスポーツ界に残してきた功績についてお話をお伺いします。

浜田さんは1986（昭和61）年7月24日、新設された東京・両国国技館で、当時最強と言われた王者レネ・アルレドンド（メキシコ）を、何と1回KOで破ってWBC世界スーパーライト級チャンピオンになりました。引退後は帝拳ジム代表として後進の指導を続けながら、テレビ解説者としても活躍されています。

勤続75年マネージャーと最年少会長

帝拳ジムは1926（大正15）年に新橋に設立された『帝国拳闘協会拳道社』が前身ですが、本日はその時代のお話は割愛させていただきます。現在の本田明彦会長のお父さま、本田明氏が戦後の焼け野原の中で、帝拳ジムを再建されたあたりからお話

をお伺いします。どんな経緯で創設されたのですか？

浜田 終戦の翌年、1946（昭和21）年8月に創設されました。本田明会長はその2年後の48年に港区三田、慶應大学の前に三田ボクシングホールをつくって、戦後の日本ボクシング復興に力を注ぎ、全日本ボクシング協会の会長にも就任して、持ち前のリーダーシップで戦後の混乱期に日本ボクシング界をしっかりとまとめたと聞いています。その48年に会長の秘書として帝拳ジムに入社したのが、今も現役の長野ハル・マネージャーです。今年でちょうど勤続75年になります。

長田 年齢が75歳ではなく、勤続75年ですか。しかも女性です。

浜田 そうです。世界でもボクシング界で75年間も仕事を続けているのは、長野マネージャーくらいでしょう。おそらく世界最長記録でしょうね。私が現役の頃は事務所に座って、選手たちの練習をじっと

見守りながら、気が付いたことを指摘する感じだったのですが、20年前ぐらいからリングの下まで行って選手にアドバイスしています。事務所で電話が鳴ると、夢中で練習している選手たちはまったく気づかないのですが、長野マネージャーだけは真つ先に電話まで走ります。べらぼうに速いです(笑)。今年4月に98歳になります。

長田 ミラクルですね(笑)。さて日本プロボクシング界は1952(昭和27)年に大きな節目を迎えます。5月19日に後楽園球場で白井義男さんが世界フライ級王者ダド・マリノ(米国)を破って、日本人初の世界チャンピオンになりました。この世界タイトルマッチ実現へ向けて、協会の会長として本田明会長も奔走されたようですね。

浜田 日本で世界タイトルマッチを開催するには、中立な統括組織のコミッションが必要でしたが、当時、日本にはまだありませんでした。そこで白井さんの日本人初の世界タイトル挑戦を実現させるため

に、全日本ボクシング協会の本田明会長の尽力で、当時の後楽園スタジアム(現在の東京ドーム)の創設者の田邊宗英^{たなべむねひで}さんを初代コミッションナーに迎えて、日本ボクシングコミッションが設立されました。白井さんの世界タイトルマッチの1カ月前のことでした。

長田 その直後に日本でテレビの本放送がスタート、ボクシングの放送も始まったようですね。

浜田 1954(昭和29)年に日本テレビで『ダイナミックグローブ』(※注1)というボクシング番組がスタートします。日本テレビと帝拳ジムで提携して興行する運びになりました。今からもう70年近く前で、現在に至るまで合計600回以上も続いています。日本チャンピオン、東洋チャンピオン、そして世界チャンピオンと、この番組から数々の名選手が育ちました。

長田 浜田さんも現役時代の1980年代は、『ダイナミックグローブ』のスター選手でしたね。

浜田 はい。私も日本テレビの『ダイナミックグローブ』に育てていただきました。

長田 さて現在の帝拳ジムの本田明彦会長は、立教高校の3年生の時に17歳で会長になられたそうですね。

浜田 1965（昭和40）年に先代の本田明会長が病気で亡くなり、当時、まだ17歳の高校生だった次男の明彦氏が後を継ぐことになりました。当時、ボクシング関係者から「いくら何でも早すぎる」という声もあり、当初は先代の妻・本田ハルさんが会長になるのですが、わずか1年で亡くなり、その間に18歳になっていた明彦氏が会長になり、先代の時代からマネージャーを務めている長野ハル・マネージャーと二人三脚で現在までやってきています。

評価と信頼

長田 長い歴史の中で帝拳ジムは浜田さんや西岡利晃さん、山中慎介さん、村田諒太さんなど日本人12

人、外国人6人の世界チャンピオンを輩出してきました。その中で最初の世界チャンピオンが大場政夫さんです。1970年（昭和45）10月、王者ベルク・チャルバンチャイ（タイ）を13回KOで破って、WBA世界フライ級チャンピオンになりました。本日、1月25日はどんな日でしょうか？

浜田 実は大場政夫さんの50回目の命日になります。73年1月2日にチャチャイ・チオノイ（タイ）を12回KOで破って5度目の防衛に成功しました。初回到強烈なダウンを喫したのですが、逆境をはね返しての逆転ノックアウト勝利でした。その劇的な試合は、翌1月3日の新聞の朝刊で、私が住んでいた沖縄でも大きく報じられました。当時、私は小学生でしたが、倒されても、倒し返して勝つ、日本には大場政夫さんという強い世界チャンピオンがいるんだと強く心に残りました。それから3週間後の1月25日の夕刊に、大場政夫交通事故で死亡という記事が出て、子どもながらに本当にショックを受けま

した。生きていれば73歳になります。あれから50年。過ぎてみると早く感じます。

長田 偶然にも本日が50回目のご命日なんです。さて、現在の帝拳ジム会長、本田明彦氏は、世界チャンピオンの育成にとどまらず、海外にも太いパイプを築き、今や世界的プロモーターとして海外から高く評価され、信頼されています。

浜田 無敵の世界ヘビー級チャンピオンとして一時代を築いたマイク・タイソンを知らない人はいないと思います。そのタイソンの世界タイトルマッチを米国以外で初めて興行したプロモーターが本田会長なんです。1988（昭和63）年3月に東京ドームのこけら落としで、トニー・タップス（米国）との防衛戦を実現させました。その2年後の90年2月にもジェームス・ダグラス（米国）との試合を東京ドームで興行しました。2度目のタイソン―ダグラス戦は、試合前の掛け率でタイソンが42―1と圧倒的有利でしたが、結果はタイソンが10回KOで初の

敗北を喫しました。「世紀の番狂わせ」として今も世界で語り継がれる歴史的一戦になりました。

最近では昨年の4月9日、さいたまスーパーアリーナで開催された村田諒太とゲンナジー・ゴロフキンの世界ミドル級王座統一戦。世界でも注目されたこの試合は、両者のファイトマネーの合計が20億円以上と報じられ、日本で過去最大の興行規模でした。これも本田会長のプロモートでした。

長寿とバイブル

長田 浜田さんが解説をされているWOWOW『エキサイトマッチ』（※注2）も、帝拳プロモーションの提供です。1991（平成3）年の開局から続くこの番組はボクサーのバイブルとも言われているそうですね。

浜田 そうですね。90年の試験放送スタートから33年になります。当時、タイソンの防衛戦を日本で成り立たせた本田会長が、海外の有力プロモーターたち

と交渉を重ねて、世界中のボクシング放送を一括してWOWOWで放送することを実現させました。これは世界でも画期的なことでした。ボクサーにとつても、海外の第一戦で活躍する世界チャンピオンたちの映像を、毎週テレビで見え勉強することができるようになったわけです。この33年、村田諒太をはじめ日本の世界チャンピオンたちは、ほぼ全員がこの番組を見て育つたと思います。

長田 浜田さんは沖縄県出身のボクサーでした。小学4年生の時に世界チャンピオンになる夢を抱き、高校卒業後に東京の帝拳ジムに入門されました。79年5月のプロデビュー以来44年、ずっとジムにおられます。帝拳ジムの魅力についてお聞かせ下さい。

浜田 魅力というか、帝拳ジムは日本にあるボクシングジムの中でも屈指の古いジムで歴史もあります。本田会長も長野ハルマネージャも確かに年は取りました。でも、やはりこの帝拳ジムはこれから何年、何十年後もなくしてはいけないと思っています。

★帝拳ジム 1926年(大正15)7月、日本ボクシング草創期の名選手、荻野貞行が東京・新橋駅近くの土橋ガード下に設立した『帝国拳闘協会拳道社』が前身。後に後樂園スタヂアムを創設して社長となった田邊宗英の資金援助を受けて、田邊会長、荻野師範の体制で発足した。第2次世界大戦後はマネージャーだった本田明氏が会長として1946年に再建した。1948年には三田日活館を買収して三田ボクシングホールを開設。1954年に東京・北区王子に移転した。1983年に新宿区に移転。その後、四谷をへて98年6月に現在の新宿区神楽坂に移つた。

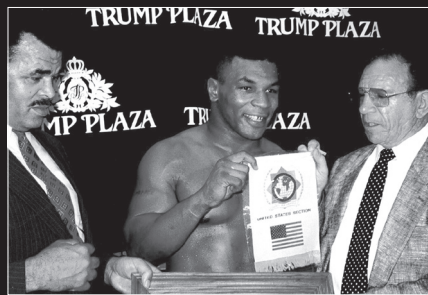
【注1】ダイナミックグロブ 1954年(昭和29)12月21日にスタートしたボクシング中継番組。日本テレビと帝拳ジムが提携して興行。1962年4月の後樂園ホールのことから落として興行も帝拳ジム主催の『ダイナミックグロブ』だった。80年代のボクシング人気低迷期から現在に至るまで定期的に興行を続けて、長きにわたつて多くのボクサーを育成。2021年に600回を超えた。

【注2】WOWOWエキサイトマッチ 1991年4月のWOWOW本放送開始から毎週2時間番組の「エキサイトマッチ」をスタート。現在も続く同局最長寿番組となり、30年間で約4000試合以上を放送した。マイク・タイソンの試合をはじめとした世界ヘビー級タイトルマッチやオスカー・デラホージャ、フロイド・メイウエザー、マニー・パツキヤオらスター選手たちの世界注目のスーパーファイトは現地から生中継している。村田諒太や井上尚弥ら多くの世界チャンピオンたちが、この番組を教科書にして成長した。

日本ボクシング界— マイク・タイソンの衝撃

取材・構成 首藤正徳

挑戦者ダグラスに10回KO負けしたタイソンは初の敗北を喫した(1990年2月11日、東京ドーム)



会見で笑顔を見せる無敵時代のタイソン
(1989年7月、米国アトランティックシティ)

現役世界チャンピオン不在で始まった平成元年(1989年)から34年。今や日本は世界屈指のボクシング大国に躍進した。その原点ともいえるのが88年(昭和63)と90年(平成2)に東京ドームで開催された統一世界ヘビー級チャンピオン、マイク・タイソン(米国)の2度の防衛戦だった。米国以外で初めてタイソンの世界タイトルマッチを興行し、成功させた。その衝撃波は令和の時代を迎えた今も続いている。

昭和から平成に変わるころ、日本ボクシング界は冬の時代だった。

1988（昭和63）年、89年（昭和64・平成元）の年間最優秀選手は該当者なし。89年は1年を通して現役世界チャンピオンがいなかった。日本のジム所属選手の世界挑戦は、88年1月から実に21連続失敗。ボクシング人気も低迷して、ゴールデンタイムが指定席だった世界タイトルマッチのテレビ中継は、夜から休日の昼間の時間帯へと移行しつつあった。

冬の時代と15億円

そんな時代に史上最強と言われた無敗の統一世界ヘビー級チャンピオン、マイク・タイソン（米国）は、日本にやってきた。88年3月21日、東京ドームでトニー・タップス（米国）との防衛戦が実現した。興行した後楽園スタジアム（現東京ドーム）の当時の興行企画部長で、後に日本ボクシングコミッ

ション理事長を務めた秋山弘志氏は「最高10万円のチケットが2、3日で完売した。衝撃的だった」と後に回想している。

会場は5万1000人の大観衆で埋め尽くされた。リングサイドには俳優の勝新太郎や三船敏郎、薬師丸ひろ子、映画監督の山田洋次、作家の遠藤周作、スポーツ界から長嶋茂雄、ジャイアント馬場、アントニオ猪木ら各界を代表する著名人で埋め尽くされた。ミック・ジャガーやモハメド・アリら海外のVIPも観戦にきていた。

試合はタイソンの2回KO勝ち。チケット代、スポンサー料、海外の放映権料などを含めた総売上15億円は、1日の興行として今も最高という。

デビューからKOの山を築き、無敗のまま3団体の世界王座を統一したタイソンは、モハメド・アリと並び歴代最強ボクサーと評されていた。1試合の報酬が10億円を超える世界で最も稼ぐスポーツ選手で、試合はカジノでも収益が見込めるラスベガスな

ど米国内の一部に限られていた。タップス戦は初めて米国以外で開催された防衛戦だった。

とんとん拍子とビックバン

「完成した東京ドームを世界に広めるため、こけら落とし興行として企画したのでそれなりの資金は用意した」と秋山氏は振り返る。それでも交渉は難航した。当初、大手広告代理店を窓口にはタイソンサイドと交渉を続けたが折り合わなかった。暗礁に乗り上げた時、ボクシング業界に幅広い人脈を持つ帝拳ジムの本田明彦会長がプロモーターに名乗り出た。「失敗したら私は辞職する覚悟だったが、交渉を本ちゃん（本田会長）に任せたら、とんとん拍子にうまくいった」（秋山氏）。

90年2月11日、再び本田会長は東京ドームでタイソンの防衛戦を実現させた。リングサイドには不動産王で後に米大統領となるドナルド・トランプ氏の顔もあった。しかし、初回の1.5倍の最高15万円

に設定したチケットの売れ行きは伸び悩んだ。試合前のブックメーカーの賭け率は42-1でタイソン圧倒的有利。勝って当たり前の試合に、大衆の財布のひもが固くなったのだ。ところが、この試合で世界のボクシング史に刻まれる『世紀の大番狂わせ』が起きる。挑戦者ジェームス・ダグラス（米国）に、タイソンが10回KOで初めて負けたのだ。

中継した日本テレビで解説をした元WBC世界スーパーライト級チャンピオンの浜田剛史氏（現帝拳ジム代表）は「タイソンは練習でダウンするなど調子が悪かった。アナウンサーの『時代が変わった』という言葉覚えていて。その試合を日本から世界に発信したことは大きいと思った」と当時のことを鮮明に記憶している。試合は米国をはじめ世界50カ国以上に放送されていた。

日本テレビの視聴率は昼間の試合にもかかわらず38・9%（ビデオリサーチ調べ）。KO負けの瞬間は51・9%を記録。その衝撃が冬の日本ボクシング

界に「ビッグバン」を起こした。

タイソン効果で国内の試合にも観客が押し寄せ、ジムの練習生が急増した。91年のプロテスト受験者が88年の1:5倍に増えた。「タイソンはボクシングファンも、そうじゃない人も引きつけた」と浜田氏は言う。タイソン敗戦の4日前にWBC世界ミニマム級王座を奪取して、平成初の世界チャンピオンになった大橋秀行氏（現大橋ジム会長）は「タイソン戦の試合の前後、日本タイトルマッチでもない普通の10回戦の興行でも後楽園ホールが超満員になった。ブームが来たと思った」と証言している。

一方でタイソンの防衛戦を2度も成功させたことで、日本の国際的な評価も高まった。「世界の日本を見る目が変わった。試合の解説で米国に行くのと対応も全然違った」（浜田氏）。海外との太いパイプができたことで、日本選手の世界タイトルマッチの興行数も急増した。87年には年間5試合まで落ち込んでいたが、辰吉丈一郎が「浪花のタイソン」の異名

で一気にスターに駆け上がるなど、92年には19試合に増えて世界チャンピオンも一気に5人になった。94年12月の薬師寺保栄—辰吉のWBC世界バンタム級王座統一戦の視聴率は39・4%。あのタイソン—ダグラス戦の数字も超えた。

信頼と人脈と世界初

タイソンが東京で世界王座を失って半年後、日本初の民間衛星テレビ（WOWOW）の放送衛星が打ち上げられた。91年4月に本放送を開始する同局が、開局PRの目玉に選んだのがタイソンだった。復帰第2戦から独占契約で生中継した。チーフプロデューサーだった大村和幸氏は「ビジョンは世界最高峰を伝える。そこでタイソンに目をつけた。負けたとはいえ、知名度と実力は圧倒的だった」と振り返る。

番組名『エキサイトマッチ』。タイソン戦のほか、毎週2時間枠で、世界中で年間約120試合開催さ

れていた世界タイトルマッチのうち100試合以上を放送した。「当時、ドン・キングら米国3大プロモーターは、それぞれテレビ局が分かれていた。本田会長に交渉をお願いしたらその壁を超えて放送権を獲得できた。これは世界初の画期的なこと。タイソンをプロモートした信頼と人脈のおかげです」と大村は話す。

長寿番組とプロモート力

現在も続くこの同局最長寿番組は、日本人ボクサーのレベル向上に大きく貢献した。「あの番組で日本選手のレベルが飛躍的に上がった。毎週、世界一流の技術を映像で見ても、選手がまねするようになった。日本のボクシングを強くした一番の要因」と大橋氏は分析する。「学生時代から番組を見ていた村田諒太選手が、俺のトレーナーはエキサイトマッチでしたと言ってくれた」と大村も明かす。

日本人初の世界チャンピオンになった白井義男が

1952年（昭和27）5月19日に世界フライ級王座を奪取して以来、日本のジム所属の男子の世界チャンピオンは96人。タイソンの東京ドーム防衛戦以前の35年間で27人だったが、その後の35年間で実に69人もの世界チャンピオンが誕生し、日本は世界屈指のボクシング大国へと躍進を遂げた。

近年は王座がWBAとWBCの2団体からIBFとWBOを含めた4団体が増えたことによる影響も大きいし、日本選手のレベルも向上した。一方で浜田氏は「いくら強い選手でも力があるときに挑戦するチャンスがなければ世界チャンピオンにはなれない。世界タイトルマッチという舞台を数多くつくれるようになったプロモートの力も大きい」と話す。

令和と記憶

去年は日本ボクシング界にとって歴史的なビッグイヤーになった。

4月9日、さいたまスーパーアリーナで、ミドル

級史上最強とも言われたIBF世界ミドル級チャンピオンのゲンナジー・ゴロフキン（カザフスタン）と、WBA世界ミドル級スーパーチャンピオンの村田諒太（帝拳）の、世界注目度の2団体王座統一戦が実現した。あのマイク・タイソンの東京ドームでの防衛戦を上回る、両者のファイトマネーの合計が20億円を超える国内史上最大のボクシング興行になった。

さらに世界バンタム級チャンピオンの井上尚弥（大橋）が6月7日にノニト・ドネア（フィリピン）、12月13日にポール・バトラー（英国）と、2試合続けて世界王座統一戦をKOで圧勝して、史上9人目、アジア人で初めて4団体のタイトルを統一。また世界で最も権威のある米ボクシング誌『ザ・リング』が各付けするパウンド・フォー・パウンド（階級の枠を超えての現役最強ランキング）でも、日本人として初めて1位にランクされた。

昨年1月14日、東京・後楽園ホールで行われたW

OWOWエキサイトマッチ30周年記念イベントで、井上はこう語っている。「ボクシングを始める前）家族でご飯を食べるとき、テレビでエキサイトマッチが流れていた記憶がある。（今も）役に立っていると思う」。あのマイク・タイソンの衝撃波は、30年余をへた令和の時代に入った今も続いている。

（2019年4月18日付の日刊スポーツに掲載した記事を、追加取材を加えて大幅に加筆・修正したものです）

★マイク・タイソン 1966年6月30日、米ニューヨークブルックリン生まれ。85年3月のプロデビューから19連続KO勝ち。86年11月、バービックからWBC世界ヘビー級タイトル奪取。87年にWBA、IBFの3団体統一。統一王座を6度防衛後、90年2月にダグラスに敗れ王座陥落。婦女暴行で92年から2年間収監された後、96年3月にWBC王座（剥奪）、同9月にはWBA王座奪回。同11月、ホリフィールドに敗れ陥落。再戦で耳にかみつぎ失格負け。ライセンス剥奪処分も98年10月に再交付。02年6月にWBC、IBFチャンピオン、ルイスに8回KO負け。50勝（44KO）6敗2無効試合。身長180cmの右ファイター。

影響を受けた本

風と共に去りぬ

著者＝マーガレット・ミッチェル
(新潮文庫)
(三笠書房)
(岩波文庫)



この本を手にとったのは高校生の時だったように思う。合宿や遠征などの際、スマホがなかった時代なので本を持ち歩いた。読み終わってしまうのが嫌だったので長編の小説が多かった。『風と共に去りぬ』の主人公スカーレット・オハラは女性の生き方を考えさせ、私の人生に少なからず影響を与えた



山口香(やまぐち・かおり)

1964(昭39)年東京都生まれ。6歳から柔道を始め、第3回世界女子柔道選手権(1984)で日本女子初の金メダル。ソウル五輪(1988)で銅メダル。現在は筑波大学で教鞭をとる傍ら、スポーツの普及発展、ダイバーシティの推進に務めている。

思っている。

有名な作品なので改めてストーリーを書く必要はないと思うが、南北戦争が舞台で裕福な家の気の強いお嬢様が戦争という予期しない出来事に翻弄されながらも力強く生きていくという物語である。

対照的な4人の男女が登場する。美しく高慢で自己愛が強いスカレットと、博愛精神を持ち、弱々しく、守ってあげたいと思わせるメラニー。野心的な性格で自己中心的だがやり手のレット・バトラーと優しいが優柔不断なアシユリーである。この4人が交錯しながら物語が進んでいく。単純なラブストーリーではない現実が複雑に絡み合っていく。この本を読んだ人はスカレット派かメラニー派に分かれるだろうと思う。私は断然スカレット派だった。自分に自信を持ち、前向きに逞しく生きる姿は現代社会につながる自立した女性像であり、好きだった彼女の生き方には賛否両論あるだろうが、「女だから黙って男に従います」ではなく、「自分の相手は自

分で選ぶ」「自分の生活は自分で守り抜く」という強い覚悟で弱音を吐かない強さが好きだ。

人の性格や生き方は、本や映画の主人公などに少なからず影響を受けているような気がする。私を知っている人の山口香評は「生意気、物怖じしない、口がたつ」などではないだろうか。当たっていると思う一方で、人が思うほど強い人間ではない。スカレットも強気と弱気が常に交錯する。周りから強く見える人間ほど、水に浮かぶアヒルのように水面下では懸命に足を動かしている。そして、人が思うほどに勝利感も満足感もない。

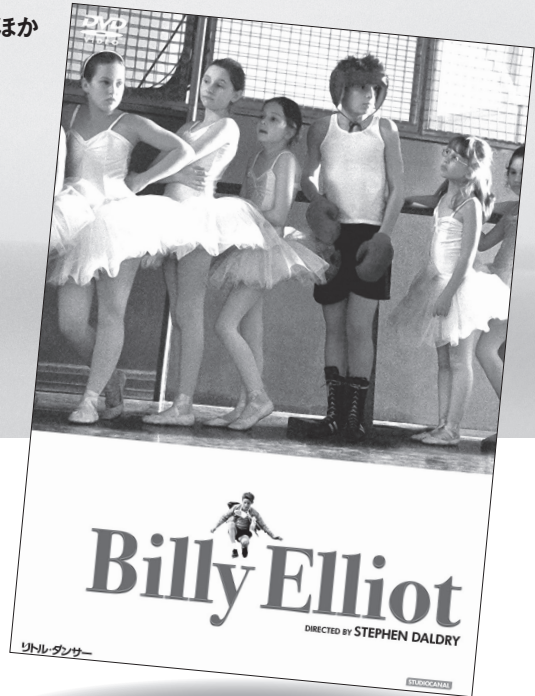
彼女が最後に発する言葉「Tomorrow is another day」はあまりにも有名だ。生きていけば嫌なこともあるし、逃げてしまいたくなることも多いが、実際には逃げる勇氣もない。「明日」は違うことが起きるだろうという期待と楽観主義。スカレットほどの強さはないが、下を向くとなくまっすぐ前を向いて生きたいと思う。

影響を受けた映画

リトル・ダンサー

監督=スティーブン・ダルドリー

CAST=ジェイミー・ベル、
ジュリー・ウォルターズほか
(2001年日本公開)



この映画は、イギリス北部の炭鉱の町に住む少年
ビリーが、バレエに惹かれ、偏見や困難を乗り越え
て夢を実現するストーリーである。男の子はボクシ
ングで強く、女の子はバレエで美しくという典型
的なジェンダーバイアスから物語が始まる。また、炭
鉱で働く父と兄、彼ら労働者のストライキ、貧しい



山口香(やまぐち・かおり)

1964(昭39)年東京都生まれ。6歳から柔道
を始め、第3回世界女子柔道選手権(1984)
で日本女子初の金メダル。ソウル五輪
(1988)で銅メダル。現在は筑波大学で教鞭
をとる傍ら、スポーツの普及発展、ダイバーシティの推進に
務めている。

生活がグレーの空と重なる。

父親は「男はサッカーかボクシングかレスリングだろ」とビリーがバレエをすることを完全否定するが、最後には息子の夢を受け入れる。そこに至る父の苦悩や変化していく姿にも共感できる。オーディションを受けに行くお金を工面するために、ストライキをやめてビリーの兄と言い争うシーンで父は「俺たちには未来がないがビリーには未来がある。才能を伸ばしてやりたいんだ」と涙ながらに訴える。皆が夢を持てるわけではない。現実には、日々の生活を生きたことが精一杯で夢を持つことすらできない人の方が多い。だからこそ、夢を持つ人を応援してあげることの尊さ、応援してもらうことの有り難さが伝わる。

ビリーがバレエにのめり込んでいく姿も微笑ましい。オーディションの面接で「踊っている時はどんな気持ち」と聞かれ、「踊り始めると何もかもが消えて宙を飛んでできる気分になる」と答える。ビリー

の才能を見出したバレエの先生が本格的なレッスンを始めるにあたって彼の大切にしているものを持つてこさせる。その中に早くに死んだ母親からの手紙があり、そこには「自分を大切に」と書かれてあった。踊ることは、彼にとつてぶつけようのない怒りや解放の表現でもあったのだろう。

映画の作り手には伝えたいメッセージがある。この映画が伝えたかったことはなんなのだろう。家族の愛、多様性、貧困、そして夢、多くのメッセージが込められていた。その一つひとつが決して恩着せがましくなく、素直に心に響いた。壮大なドラマを見せられたわけではなく、どこにでもある日常、家族に起こりうる出来事である。

この映画には、感動よりも共感がある。無力だと感じた子ども時代、背中を押して応援してくれた家族や周囲の人々、指導者として、親として人を育てる立場の苦悩など等身大の自分が重なる。スポーツ指導者や子育て中の人にはぜひ見てもらいたい。

影響を受けた舞台

ミス・サイゴン

作曲・脚本=クロード=ミッシェル・シェーンベルク

作詞・脚本=アラン・ブープリル(オリジナル版)

訳詞=岩谷時子(日本版)

(1989年ロンドン初演、

1992年日本初演)



今夏開催される世界水泳マスターズ大会を目指している私にとって、『ミス・サイゴン』の市村正親さんは衝撃であり、刺激であり、そして神である……。2021年コロナ禍で自宅待機をしている間にミュージカルを見まくった私。『レ・ミゼラブル』や『オペラ座の怪人』など、いわゆる名作を改めて見



小谷 実可子(こたに・みかこ)

1966(昭41)年東京都生まれ。桐朋女子高校一日本大学。幼少の頃からアーティストティックスイミングで頭角を現し、1988年ソウル五輪でソロとデュエットで銅メダル。

1992年バルセロナ五輪は代表選出も出場機会なく大会後に引退。その後は五輪、教育関連の要職を歴任。現在は日本オリンピック委員会(JOC)常務理事などを務める。

返していく中、『ミス・サイゴン』は4回も見た。何といつても、エンジニアがアメリカ生活を夢見て歌う「The American dream」の存在感と華やかさに魅了された。そして、あのほとばしるリズム感とパワーは外国人にしか出せないだろうと思っていた。ところが、私の偏見を見事に覆したのが、恥ずかしながら初めて見た日本版『ミス・サイゴン』の生の舞台だったのだ。

オン歳73歳の市村正親さん演じるエンジニアを見て、私は前のめりのまま完全に固まった。飛び散る汗の量、動く筋肉の線、声の質量……もしかしたら、どれも映像で見たフィリピン系アメリカ人俳優、ジョン・ジョン・ブリオネスよりも多くはないかもしれない。でも、その存在感とこちらのハートに直接届く熱量が、私の心を鷲掴みにして離さなかった。身体中から滲み出る明るい重厚感……。

これだ！ 私が今、水の中で求めているもの。目指すは、帝国劇場でもなければオリンピックでもな

い。鹿児島市鴨池公園プールでの、多様な年齢の人が集まる世界マスターズ。軽い気持ちで出場しようと思っていた私に「小谷実可子に中途半端は許されない。出るなら真剣に」というコーチの言葉に一度は心が折れたが、真剣にやっつてこそ楽しい！ 今の私にしかできないシンクロがある。そう、市村さんのように……何十年も生きて人生を謳歌したものにしか出せない本当の大人の魅力。73歳の市村さんに比べれば、私なんてまだ青二才。体が辛い、足がつる、息が苦しい、なんて言つてられない……。

自分をそう奮い立たせてくれた矢先、彼がエンジニア役を卒業することを知った。なんてこと……でもきつと最後の最後、全ての思いを出し尽くされたのであろう。ラストステージに涙はなく、からりと卒業された。それがかつこよかった。半年後の2023年夏、市村さんからいただいたパワーと感動と教えを胸に、世界の舞台で私なりの表現で恩返しをしたいと思う。

影響を受けた映画

アラジン (Aladdin)

監督=ジョン・マスカーロン・クレメンツ (アニメ版)

ガイ・リッチー (実写版)

(1993年アニメ版、

2019年実写版日本公開)



「ジーニーに、自由を！」

私はここで何度も泣いた。

この作品のタイトルは『アラジン』。貧しくても、人を思いやる優しい心を持つ主人公が、本当の自分を追い求めながら成長していく、不朽の名作。

幼い頃は、陽気で魔法が使えるジーニーが大好き



中村 美里 (なかむら・みさと)

1989 (平成) 年、東京都生まれ。9歳で柔道を始め、小学6年生で五輪出場を将来の夢にする。世界選手権では3度優勝。五輪は北京大会から3大会を経験し、北京とリオデジャネイロで銅メダル獲得。大会解説や講演、柔道教室など普及活動も行っている。生涯現役。

だった。もし自分の前に現れてくれたら……そう考
えるだけでワクワクしたし、自由を手に入れて大喜
びするハッピーエンドを楽しんだ。

それがどうだ。大人になり実写映画や舞台の『ア
ラジン』を改めて観ると、心に響く言葉やシーンに
溢れていた。

例えば、魔法で偽りの王子になったアラジンが、
「持っていない奴は持っているフリを（するしかな
い）」と、偽りを正当化し、己の弱さから目を背け
ようとする。これに対し、「自分らしく」「嘘で何か
を手に入れてももつと惨めになる」と、ジーニー。
これは他人事ではない。競技をしていると、このア
ラジンのように「弱い自分」と対峙することが何度
もある。私の場合、うまくいかない原因を外部に見
つけようとしている時は要注意だ。自分にベクトル
が向いていない時点で、試合に勝っても、人として
競技者としての成長はない。逆に、試合に負けたと
しても、自らと向き合って練習が出来ていれば、「こ

れが今の実力」と割り切り、次に進める。

アラジンは親友のおかげで、探し続けてきた「本
当の自分」を見つけることが出来たのだ。

もう一つ、大好きなシーンがある。冒頭で挙げた、
アラジンが最後の願いを青い親友のために使った
「ジーニーに、自由を！」のシーンだ。

アラジンは、ジーニーを自由の身にするという約
束を、一度は自分のために破ろうとする。しかし、
大切なことに気付かせてくれた親友のため、ジャス
ミンと地位を失う覚悟で約束を果たすのだ。湧き上
がる自分の願望を抑え、代わりに誰かの願いを心か
ら叶えたいと思えるのは簡単なことではない。だか
らこそ、彼の思いやりの心と、そう思える親友との
絆に、胸が熱くなる。

そして何度も見ているうちに、その関係は私の好
きな言葉である「自他共栄」の精神に通じている、
という発見まであった。

『アラジン』あらゆる視点から観て頂きたい。

影響を受けた映画

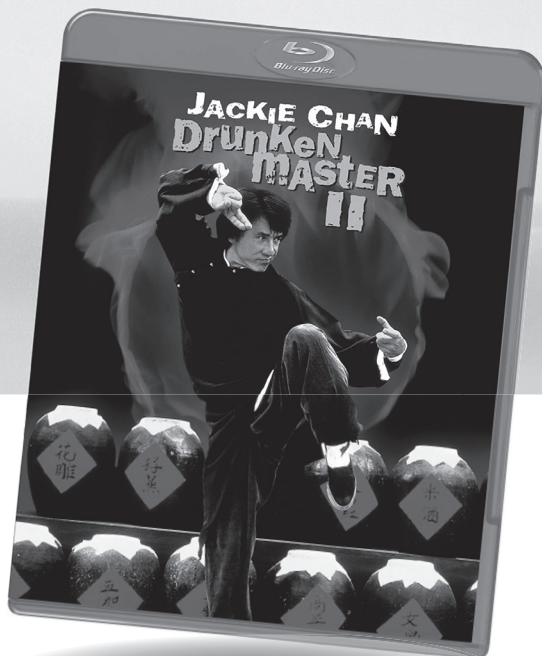
酔拳2

監督=ラウ・カーリョン、ジャッキー・チェン

CAST ジャッキー・チェン、

アニタ・ムイほか

(1994年日本公開)



僕は1990年代、フリースタイルスキー、モーグル競技日本代表として2度オリンピックに出場した。モーグル競技はコブ（起伏）のあるコースを滑り、その間に二つのエアを飛ばぶアクロバティックな競技だ。競技を引退した今でもコブを滑るのは大好きで研究や練習を重ねながら普段のスキーレッスン



三浦 豪太(みうら・こうた)

1969(昭44)年神奈川県生まれ。'94リレハンメル、'98長野冬季オリンピック出場(モーグル競技)。父・三浦雄一郎のエベレスト遠征に同行、2度の登頂('03、'13)を果たす。米国ユタ大学卒業。順天堂大学院にて博士号(医学)修得。幅広い年代のアウトドアプログラム指導、スポーツ解説者として活躍。慶應義塾大学特任准教授、インクルーシブ野外活動上級指導員、札幌国際大学客員教授。

でもコブの滑り方を教えている。しかし、年を追うごとに変化を感じるようになってきた。以前だったら多少大きなコブでも筋力でカバーして乗り越えてきた。ところが最近体が重く、ターンのキレも鈍いが、その度に年齢や忙しくなった仕事による練習不足を言い訳にしている。

そんな中最近、ジャッキー・チェン主演の映画『酔拳2』（1994年）をストリーミングサービスで見つけ、懐かしさのあまり購入、視聴した。この映画はジャッキーが実在したカンフーマスターⅡウォン・フェイフォンに扮して、中国の国宝を狙う列強国相手に秘拳・酔拳を駆使して戦う。酔拳はお酒に酔ったような動きで相手を惑わすトリッキーな武術だ。動きがユーモラスで派手なため、見せかけで、実践的には向かないとも言われていた。ところが彼がこの映画で魅せた酔拳は人の動きとは思えないほどの躍動感があった。目まぐるしく変化するユニークな型で敵を翻弄し、捨て身のアクションで酔拳に

命を吹き込んだ。

そもそも僕は小三の時、最初のジャッキー映画を見て以来の大ファンだ。当時のジャッキーはワイヤアクションもスタントも使わない本物のアクションにこだわっていた。エンドロールで必ず映し出されるNGシーンでは、完成されたアクションの裏には多くの失敗があり、時にはそれが大怪我に繋がるようなことも映し出されていた。そのため、ストーリーや演技を楽しむというよりもジャッキー・チェンそのものを見に行っていた気がする。その憧れが、僕をモーグルというアクション満載なスキー種目の道へと導いた。

改めて『酔拳2』を調べてみると驚くべきことにジャッキーが40歳で作った映画だった。肉体的なピークはとづくに過ぎていながら、異次元のアクションを演じている。そこには年齢を言い訳にする余地は一切ない。まだまだモーグルにも自分にも可能性は残されているのではないかと映画は教えてくれた。

影響を受けた本

ハリー・ポッター

著者=J.K.ローリング 著
(静山社)



「エクスペクトパトローナム！」^{どくと}つつい、独語に口走ってしまう魔法の言葉です。『ハリー・ポッター』シリーズ全7作は、本当に大好きな作品です。自分自身が興味を持ったきつかけは、意外なものでした。25年ほど前、静岡県の公立中学校の教師をしていたのですが、ホームルームの最中に生徒が私



河合 純一 (かわい・じゅんいち)

1975(昭50)年静岡県生まれ。生まれつき左目の視力はなく、15歳で右目も失明。パラリンピックにはバルセロナ(1992)からロンドン(2012)まで6大会に出場。水泳競技で金5を含む全21個(日本人最多)のメダルを獲得。2016年にパラリンピック殿堂入り(日本人初)。早稲田大学大学院教育学研究科修了。静岡県公立中学校の社会科教師、静岡県総合教育センター指導主事、国立スポーツ科学センター先任研究員等を経て現職。東京2020パラリンピック競技大会・北京2022パラリンピック冬季競技大会日本代表選手団団長。慶應大学、上智大学、筑波大学非常勤講師。(一社)日本パラ水泳連盟会長。(交財)愛知・名古屋アジア・アジアパラ競技大会組織委員会副会長。公益財団法人日本パラスポーツ協会理事、日本パラリンピック委員会委員長。

が話をしているときに読書をしていたのです。その本が第1作の『ハリー・ポッターと賢者の石』でした。私の話していた内容がつまらなかったのだと思います。私ですが、新任の私は腹が立ち、その本を取り上げ、あろうことか生徒の目の前で投げ捨ててしまったことを覚えていきます。感情のままに行動したことを今は恥じてもいません。

しかし、生徒が怒られるかもしれないことを覚悟してまでも読みたかった本への興味は高まり、早々に点字図書館から朗読テープを借りて聞き始めました。私にとつての読書は聞くことです。まさに、このハリー、ロン、ハーマイオニーたちのストーリーに聞き入り、引き込まれていきました。そのようなこともあり、その後の続編が出る度に朗読データが出来上がるのを心待ちにしました。朗読データは多くのボランティアの方々のお力で制作されています。特に印象的だったのは、北京2008パラリンピック直前、国立スポーツ科学センター（JISS）

での合宿中、練習と練習の間に最新作を聞き入っていたことです。練習に集中しながらも、共に合宿をしていた仲間たちと食事の時などに感想を語っていたことを思い出します。よい気分転換ともなり、その後の大会でメダル獲得という好成績にもつながったのではないかと思います。

ご存じの通り、このシリーズでは、一貫して愛、友情、勇気がテーマとして描かれています。これら形のないもの、つまり目に見えないものとのように向き合うのか、私が15歳で失明して以来向き合ってきたテーマでもあります。サン・テグジュペリの『星の王子さま』の一節にもあるように「本当に大切なものは目に見えない」と私も考えているからです。現在の私は日本パラリンピック委員会（JPC）の委員長として多くの関係者と信頼関係を築いていく必要があります。目には見えない信頼という絆を構築するためのヒントを探すために読み返したくなってきました！

影響を受けた映画

私をスキーに連れてって

監督＝馬場康夫

CAST 原田知世、三上博史ほか

(1987年日本公開)



タイトル通りで、べたすぎて恐縮だが、高校生の時、私自身がスキーに誘われるきっかけの一つとなったのが本映画である。

1987年に公開されたこの映画を、映画館で観たという思い出のある人も多いだろう。スキー場が舞台の恋愛ストーリーで、当時のスキーブームを加



大日方 邦子 (おびなた・くにこ)

1972(昭47)年東京都生まれ。3歳の時の交通事故により、両足に障害が残る。高校2年の時、チェアスキーと出会う。1998年長野パラリンピックで、冬季大会で日本人初となる金メダルをはじめ、出場5大会、メダル4個合計10個のメダルを獲得。日本パラリンピアンズ協会会長、日本障害者スキー連盟常任理事など。

速させた、とも言われる本映画は、いまでも冬になると毎年のように放送されて、スキー愛にあふれている。この原稿を書いている飛行機の機内プログラムでも、偶然にも上映されていて驚いた。

私がスキーへの漠然とした憧れを持ったのは小学生のころだった。片足で滑っているスキーヤーの姿をテレビでみて、自分もやってみたいと思った。義足を使っていたが、体を動かすことが大好きだった私の希望を聞いて、母が主治医にスキーをさせてみたい、と相談したこともあったが、スキーブーツが履けず断念した経緯もあった。

そして進学した高校ではスキー教室があり、親しい友人たちが参加する話題で、大いに盛り上がり、私も参加したくなった。スキーはともかく、白銀の景色を一度見てみたかったのだ。大人への階段を上りかけている横浜に住むハイティーンにとって、スキー場というキラキラした場所への旅は、ちょっと背伸びをすれば実現できそうな、大人っぽさを味わ

える憧れであり、流行りでもあった。ブームに影響を与えたのが映画で描かれている楽しいなスキーシーン&ラブストーリーだった、というわけである。

今回、原稿を書くにあたって、久しぶりに観なおしてみた。最も印象深く覚えていたのが、スキーシーンですらなく、原田知世が演じるヒロインが、夜行バスでスキー場に向かうシーンであり。そんな若き自分にちよつと呆れ、苦笑した。

映画のハイライトは、志賀高原から万座に向かう山の中のルートの滑走シーン。暗くなつてから、しかも吹雪の中で初心者に近いスキーヤーが装備もなしに滑つていこう、という無謀さに、冬山の怖さを今では知る者として、ありえないよと突っ込みを入れながらも、当時のトップスキーヤーたちが代役を務める滑降シーンでのスキー技術を堪能し、美しく描かれる雪山を見ながら、スキーを始めたころの高揚感や、自然のなかで雪と戯れ、心が解放されていく感情を思い出させられる楽しいひと時となった。

影響を受けた本

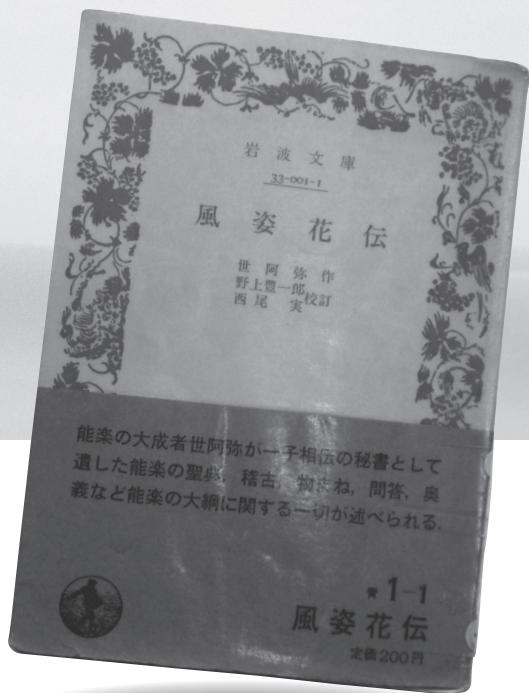
風姿花伝

作=世阿弥

校訂=野上豊一郎

西尾 実

(岩波文庫)



知りたいという自分の意思で本を買うようになってからは、体操に夢中になってからのことだ。恩師・金子明友先生の講話が元だった。能の世阿弥が著した『風姿花伝』の話聞き、岩波文庫の薄い小さな解説書を買った。能の真髄など解るよしもない私が感激したのは、その書き出しの第一章だった。



加藤 澤男 (かとう・さわお)

1946(昭21)年、新潟県生まれ。中学生のときに体操を始める。新潟南高校で国体、インターハイ出場。東京教育大学(現・筑波大学)4年の1968年メキシコシティーオリンピックに出場したのをはじめ、72年ミュンヘン、76年モントリオールに出場し、団体、個人総合、床、平行棒で金メダルを獲得。追及した美は「体操の教科書」と称えられた。日本人最多金メダリスト。1999年5月国際スポーツ記者協会が選ぶ「20世紀を代表する25選手」に日本人で唯一選出された。筑波大学、白鷗大学名誉教授。2020年文化功労者に選ばれた。

第一章「年来稽古條々」では、生涯年齢を7期に分けて各注意事項がまとめられている。600年以上前、室町時代に記述された日本が世界に誇る芸術論の元祖と言える能の解説書だ。

この第一章前半部、子供時代から、今日の高校生くらいまでの時期を3期に分け、能の稽古について、少ない字数で見事に各時期の特徴を捉え、稽古の注意事項が添えてある。その一部を要約すると以下のようになる。

年来稽古條々『七歳』

「(中略)ふとし出ださんかかりを、うちまかせて、心のままにせさすべし。」「さのみ、よぎ、あしぎとは教ふべからず。」

それらしい真似事を始めても、あまだこうだと大人の考えを押し付けてはならない。細かなことを言っても子供には通じず、逆にやる気をなくしてしまうことにもなる。

年来稽古條々『十二・三より』

「この花は誠まことの花には非ず。ただ、時分じぶんの花なり。さらば、この時分の稽古けいこ、すべてくやすきなり。」
外観には大人と同じように何でもできるようになる時期で、今風にはゴールデンエイジ。人にこの時期があることは、文化圏が異なっても世界中の人が認めている。しかし、この時期の動き方はまだ本物とは言えないので、少しずつ他のことも学ばせる。

年来稽古條々『十七・八より』

「このころの稽古には、ただ、指をさして人に笑わせるるとも、それをば顧みず(中略)心中には願力ぐわんりきを起おこして、一期の堺さかいここなりと、生涯にかけて能を捨てぬより外ほかは、稽古あるべからず。」

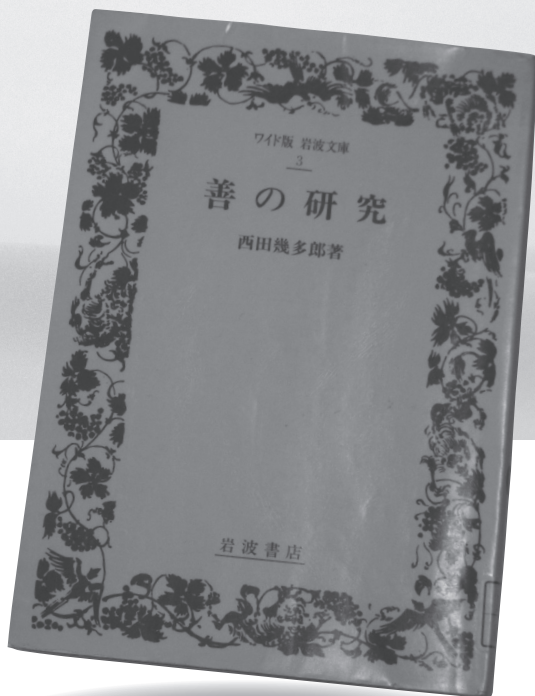
変声期や成人体型に変わる頃のことだ。恥はずかずかしさが出てくる頃でもあり、また他方では専門家として一人立し始める頃の事でもある。

これらの事項は能や芸術に限ったことではない。我々がスポーツに励むにも、また各種職業に進むにも同じことが言えよう。

影響を受けた本

善の研究

著者＝西田幾多郎
(岩波文庫)



「経験するというのは事実^{そのまま}其儘に知るの意である。全く自己の細工を棄てて、事実に従うて知るのである。純粹というのは、普通に経験といっている者もその実は何らかの思想を交えているから、毫も思慮^{ごうしよ}分別を加えない、真に経験其儘の状態をいうのである。」



加藤 澤男 (かとう・さわお)

1946(昭21)年、新潟県生まれ。中学生のときに体操を始める。新潟南高校で国体、インターハイ出場。東京教育大学(現・筑波大学)4年の1968年メキシコシティーオリンピックに出場したのをはじめ、72年ミュンヘン、76年モントリオールに出場し、団体、個人総合、床、平行棒で金メダルを獲得。追及した美は「体操の教科書」と称えられた。日本人最多金メダリスト。1999年5月国際スポーツ記者協会が選ぶ「20世紀を代表する25選手」に日本人で唯一選出された。筑波大学、白鷗大学名誉教授。2020年文化功労者に選ばれた。

この本も前掲の『風姿花伝』と似たような時期に購入した本だと記憶している。

現在の現象学という学問が日本に導入され始めた頃（大正時代）、哲学・倫理学者であった西田幾多郎の、その最初の著作『善の研究』の書き出しの一文だ。この文章は、人の運動を考えたり実践する者に取って、強烈なインパクトを与える。

何でも我が子の言うことを叶えてくれるお母さんであつても「私の箸の使い方を私に代わって覚えておいて」とは頼めないのが人間の動き方だ。この表現例は現在の運動学で「自己運動」と言われる人間の動き方の重要な性質のことだ。言い換えれば、自身の動き方の決断・実行は他人が行うことではなく、当人自身が行うしかないということだ。従つて、周囲の人はたとえ肉親であつても、あくまでも援助者であり、決断・実行するのはこれもまたあくまでも動く本人だということだ。

とどのつまり、人の動き方というものは、他者の

真似であつても工夫・変形であつても、また当人が気付かなくても、決断・実行するのは当人自身ではないのであり、その際には、同一ないし類似した動き方の体験があるか否かは、その人の動き方の決断には大変重要な事項になるのだ。

人の動き方というものは、記憶・思考を主体とする脳だけで出来上がっているわけではないということだ。いや、それ以前に、脳が活性化する前から人は何がしかの動き方をしており、動き方の獲得、思考・判断・実行にも大いに関わつて来ているはずだ。

普通、2〜3歳までに子供は立つて動き回るようになるのだが、どのようにして立ち上がったのか、その経緯を克明に覚えていた大人はまずいない。たとえそれが記憶に残らないとしても、また、人真似であれ、自身の工夫であれ、西田の言う「純粹経験」、つまり「毫も思慮分別を加えない、真に経験其儘の状態」は、人間の動き方を考える出発点として必要かつ大変重要なことだと思えるからだ。

影響を受けた本

ガンバ! Fly high

原作=森末慎二

作画=菊田洋之

(少年サンデーコミックス・全34巻)



私が選ぶ作品は漫画の『ガンバ! Fly high』です。小学生に上がると同時に体操を始め、高学年になり体操に夢中だった頃この作品と出会いました。

この漫画の主人公の藤巻俊は、中学校に入学してすぐに体操部に入部し、部員の少なかった部活だっ



笹田 夏実(ささだ・なつみ)

1995(平7)年、東京都生まれ。体操経験者の両親の影響で6歳から体操競技を始める。中学3年生で全日本選手権準優勝、帝京高校3年生、日本体育大学1年生で全日本選手権優勝。世界選手権代表を3度経験。大学4年生で引退後、大学院へ進学。現在は博士課程の学生兼体操のコーチを勤める。

たため、入部2日目から試合に出ることになります。結果は、最低点で周りに馬鹿にされてしまいますが、藤巻俊は自分や仲間と向き合い、様々な困難を乗り越えながら夢であるオリンピックの金メダル獲得に近づいていく物語です。

私は体操を始めてすぐに持った夢がオリンピックへ出ることで、この漫画は主人公と同じ夢を持つ当時の私には興味津々の内容でした。

何かをやり遂げたい時、私たちは夢や目標を掲げ、それに向かって様々な方法を考えて、試行錯誤していきます。

例えば、体操を始めるとすぐに基本の技として倒立を覚えます。倒立を真つ直ぐに正しく習得することとはとても難しいものです。倒立ができれば様々な技に繋がるのですが、完璧にできるようにするよりも多くの人が次の技へ行きたくなるのではないのでしょうか。体操の技だけでなく、ひとつのことを極めることは非常に難しいことだと思います。特にスポ

ーツの場面では極める際、辛く厳しい局面を何度も経験するでしょう。『ガンバ!』の主人公は厳しい状況でも前向きに乗り越えていく様子が描かれており、夢や目標に向かって諦めずに歩む姿はとても勇気を与えてくれます。

夢や目標をすべての人が達成できるとは限りませんが、夢や目標までの過程で何かを極めることで得る努力や経験、信頼などの多くが、その人のその後の人生に大きな力を与えてくれると思います。そして自分の好きなことを継続し、極めることはより一層大きな力を得ることができると思います。

私にとって体操を続けてきたことで得た経験や競技を通じて出会った仲間、尊敬する先生方は、今の自分自身を構成する誇りと自信になったと競技を引退した今、強く感じています。自分の競技人生の励みとなったこの漫画には感謝の気持ちでいっぱいです。これからの人生でも夢や目標を掲げ、努力することを忘れずに生活したいと思います。

「走」第5回



日本人のマラソン好きのルーツは
エチオピアの哲学者？

玉木正之

一昨年（2021年）2度目の東京オリンピックが開催された。が、スポーツの社会的影響は、1度目1964年の東京五輪が圧倒的だった。

私は小学6年生。10月10日に始まった大会の期間中2週間は、学校で連日2〜3時間がテレビの五輪観戦。大人たちも重量挙げを見て（力が入って）「肩が凝った」とか、体操やバレーボールで「ハラハラドキドキ疲れてしまった」などと、挨拶代わりにスポーツを話題にした。

なかでも強烈な印象を残したのが、マラソンで優勝したエチオピアのアベベ・ビキラだった。

マラソン全コースをTV中継したのは、このときが世界初の快挙。

しかし折り返し点を過ぎてアベベが独走状態に入ったため、まだ技術的に未熟だったテレビ中継は、アベベ一人の走る姿を30分以上も映し続けた。それは、見事な姿だった。

筋肉質の細く伸びた脚は、腕の動きに合わせて少しの乱れもなく力強く前後に動き続けた。黒く頬の瘦けた彫りの深い精悍な様子で、眼は遠く一点を見つめ、黙々と走る顔つきは、まるで哲学者が深い思索に耽^{ふけ}っているようだった。

その姿を見た日本人は、「走る」ということが人間にとってこれほど意義深いことなのかと、驚きとともに深く心に刻まれたのだった。

アベベに続いて円谷幸吉が3位に入ったのも見事だったが、ゴールインして倒れる選手が続出するなか、アベベ一人が元気に、体操し続けたのも驚異だった。その後全国に市民マラソンが生まれ、日本人が大のマラソン好きになったのも、アベベの超人的な姿の影響と言えそうだ。



夢劇場『馬』

No.30



早春のときめき

長田渚左

競馬場に向かう電車の中で、人々の顔をじーっと見たことがあるだろうか。

それは平日の朝、仕事で職場に向かう顔とは明らかに異なる共通点がある。

その顔、顔、顔には、この映画のテーマでもある「胸の高まり（ホワイル）」が見て取れる。

そんな顔を見つめながら、その日は競馬場とは別の場所に馬の顔を見に行った。

現在公開中の映画『ドリーム・ホース』である。「今まで（私は）母エルジーの娘で、デニスとサーシャの母親で、デイジーの妻だった」という平凡な主婦ジャンは、人生の夢のために競走馬の育成を思い立つ……。

スクリーンを追っていると、こんなことが起きはしまいか?! ひよつとしてこんな事故も?! と予測してしまうのだが、見事にその予測通りに展開する映画だった。エッ、それじゃあまるでおかしな話だとも思ったが、実話だった。

ストーリーを支えているのは人と馬。主演の主婦は俳優のトニ・コレット、実在した競走馬ドリームアライアンス役はボーという馬が演じていた。この人と馬の関係が絶妙なのだ。

額と額を突き合わせて、互いの心模様を通わせる。まるで本当に馬の誕生からずっと一緒に生活してきたような自然なしぐさは、芝居とは思えず、特別な「胸の高まり」へ誘い込む。それは競馬場へ向かうときの、夢を追うときめきに似ていた。

過去の痛みはもとより、昨日の悔恨や後悔もさっぱりと忘れて、期待と希望とときめきで今日の一步を踏み出す競馬場……。

映画を見ながら競馬場に行きたい、
ため息が出た。



バックナンバーのご案内

バックナンバーを、直接お申し込みいただけます。ご希望の号と冊数を明記し、送料分の切手を左記にお送りください。

〒352-0011
埼玉県新座市野火止8-16-32
株式会社東美物流
『スポーツゴジラ』係

送料値上がりのため45号より変更しました。

10冊まで 送料 400円

20冊まで 送料 700円

40冊まで 送料1200円

※特集の内容は本誌巻末カラーページとホームページに記載しています。

【ホームページ】

<http://sportsnetworkjapan.com/>

★お申し込みいただくとき『スポーツゴジラ』への感想もお書き添えいただけると幸いです。

次の夏号第59号は2023年6月

中旬刊行を予定しています。

また、バックナンバーは品切表示の号も左記の図書館でお読みになれます。ご利用ください。

●世田谷区八幡山・大宅壮一文庫
●世田谷区深沢・日体大世田谷キャンパス図書館

●港区広尾・東京都立中央図書館

●千代田区永田町・国立国会図書館

●港区芝・東京都人権プラザ図書館

●新宿区霞ヶ丘・日本スポーツ協会資料室

【理事】

五十嵐二葉（弁護士）／池井優（慶應義塾大
学名誉教授）／伊藤順蔵（早稲田大学名誉教授）

／岡田匡令（淑徳大学名誉教授）／長田渚左（ノ
ンフィクション作家）／笠原一也（日本オリ
ンピック・アカデミー名誉会長）／菊幸一（筑

波大学教授）／佐久間昇二（びあ株式会社取
締役）／重村一（㈱ニッポン放送取締役相談役）

／永井憲一（法政大学名誉教授）／山口香（筑
波大学教授）／山口良治（京都工学院高校ラ
グビー部総監督）

【事務局】

〒359-1192

埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15

早稲田大学スポーツ科学部太田章研究室気付

皆様、ご存じですか？

スポーツゴジラは年4回春・夏・
秋・冬の季刊で発行。

都営地下鉄・大江戸線・浅草線・
三田線・新宿線の各駅、全国の
大学102カ所に設置されています。

スポーツゴジラ®

2023年3月6日発行

第1巻第58号

無断転載・転売を禁じます

企画編集 スポーツネットワークジャパン

長田渚左・川本凜太郎・阿部雄輔

波多野圭吾・西本祥子・江川卓美

山内亮治・鈴木希人

制作 有限会社ナトリック

印刷・製本 株式会社美松堂

発行 スポーツネットワークジャパン

お問い合わせは左記まで

特定非営利活動法人

スポーツネットワークジャパン

〒168-0063

杉並区和泉1-40-13-401